

音楽科

箏の指導に関する一考察

—異学年交流・創作を取り入れた「さくらさくら」の単元開発—

泉谷正則

1 はじめに

我が国の学校音楽教育は、長い間、西洋音楽を基盤として行われてきた。しかしながら、近年、我が国の伝統的な音楽の良さを再認識し学校音楽教育に取り入れようと、数多くの実践や研究が行われている。伝統的な音楽についてその特徴を理解し魅力を感じることができたなら、あらゆる音楽に対する感性はより豊かに育まれるであろう。また、音楽を通してその背景となる文化を理解させることで、グローバル化する社会において広い視野から自らの価値観を深めていく、といった人間教育にも繋がると考えられる。

本研究では、伝統的な音楽の中でも箏の演奏を中心として、新たな指導方法やその有効性を探るものである。

2 単元の構想

本研究では、箏を中心として、次の2つの視点に立った単元開発を行う。

(1) 異学年交流の実施

4年生と8年生（中学校2年生）の異学年交流を取り入れることで児童・生徒の相互作用による学びの深化を図るとともに、小中一貫教育の視点に立った新たな単元の開発を行う。

(2) 発展的な活動として創作活動を取り入れる

創作活動を取り入れることで、それまで習得してきた基礎的音楽能力（音楽要素の知覚と感受）を生きて働く力にするとともに、箏の学びをさらに深化させる。

3 実践事例

(1) 題材

「箏のひびき ～いっしょに弾こう～」

(2) 単元実施学年及び人数

第8学年（中学校2年生）及び第4学年

＊第4学年については小学校教諭が指導

(3) 題材について

本題材で扱う「さくらさくら」は、江戸時代につくられた子ども向けの箏の練習曲である。国際的な場で演奏される機会も多く、日本の自然や心、伝統的な音楽の素晴らしさを感じることができる楽曲である。また、小学校では第4学年の表現（歌唱・器楽）の共通教材とされており、児童生徒にとっても親しみのある曲である。曲の構成は、14小節、A B B' A' 形式による短い曲で、音程の大きな跳躍や細かなリズムもない。陰旋法（和を強調した音階）で作曲されており、雰囲気のある旋律を創作し易い音階である。本単元では中学校の教科書に掲載されている二重奏の楽譜を使用する。主旋律のパートでは「スクイ爪」や「流し爪」、副旋律のパートでは「ピツィカート」「トレモロ」「合わせ爪」といった奏法が用いられている。箏の初心者が基本的な奏法や所作を正しく習得し、箏の本質的な良さを感じながら無理なく演奏を楽しむ、発展的な奏法を学びながら創作によってこれらの学びを深めていく学習に適した題材である。

本単元は、主旋律の演奏→二重奏の演奏→創作を取り入れた4・8年生合同のグループ演奏（発展的な学習として）といった流れで学習をする。

演奏については、ゲストティーチャーによる指導も計画しながら、演奏の質を高めるようにする。

創作について、4年生は主旋律の前奏と間奏、8年生は4年生のふしに合った副旋律を創作し、4・8年生合同でアンサンブルをする。主旋律の音の動きや響きを感じながらそれに合った旋律や表現方法をつくり演奏する力、また、アンサンブルでは旋律の繰り返しや変化、音の重なりを聴き感じながらアンサンブルをする力を培っていく。それにより、箏の音楽の良さをより深く感じることができるようにしていく。また、振り返りを適宜させることで、音楽的な気づきの内容だけでなく、より違った表現を見つけようとしたか、一緒に音楽をするために他者とどのようにかかわろうとしたかなど、音楽や他者に対する自分の向き合い方について振り返らせる。それにより、箏と自分とのかかわりを深めさせ、箏に対する価値観を深めさせていく。

題材の概要は表1に示すが、以下、8年生の指導を中心に本題材について述べる。

(4) 題材の目標

「お互いの表現を感じながら演奏を繋いでいくことで、箏の旋律や響きの良さを感じさせる。」

(5) 題材の評価規準

①音楽への関心・意欲・態度

箏の表現や演奏を追究することができる。他者ととともに音楽をつくりあげることができる。

②音楽表現の創意工夫

箏独特の音の動きや響きを感じながら、旋律を工夫し、それを表現することができる。

③音楽表現の技能

美しい姿勢や奏法で演奏することができる。

④鑑賞の能力

箏独特の響きや、奏法による表現の多様さを聴き取ることができる。

(6) 題材の実施計画

本単元は全8時間で実施する。実施計画は、以下の通りである。

①第1次

「さくらさくら」の二重奏をしよう。(3時間)

②第3次

箏の旋律を創作しよう。(2時間)

③第4次

いっしょに表現しよう(発表会)。(2時間)

④第5次

振り返ろう。(1時間)

(7) 授業の実際

中学校では、7年生で主旋律の演奏を行っているので、8年生ではその復習から始めた。音を聴かせたり演奏を鑑賞させたりしながら、正しい姿勢や奏法が音の響きとどのようにかかわるかを感じさせたり、「音がない時間」、「余韻が響く時間」といった「間」を聴くこと、その時の手や身体の流れ(動き)を感じることの大切さに気づくことができるようにした。箏の音楽の特徴や良さについて、個々人の思いが芽生えるように、意図的に指導を行うようにした。

・心を落ち着け音をよく聴いて演奏することを大切にすれば良いと思います。一つ一つの音の響きや余韻を感じて、礼儀正しく上品に演奏すると良いと思います。なぜなら、楽器には、演奏する人の気持ちや行動が音にはつきりと表れてくると思うからです。

・箏を演奏する趣(おもむき)を大切にすれば良いと思います。「礼に始まり礼に終わる」という日本らしい落ち着きのある行動や、余韻を楽しむように2秒止まることで、奏者も聴き手も箏の深みを楽しめると思います。

・箏を演奏する時箏を大切に扱うことを大切にしたら良いと思う。大切にするという心が演奏のきれいさに表れてくると思うからだ。

・箏は、美しい音色や余韻を楽しむものなので、心を落ち着かせ静かな環境で行う。そして、箏や爪は楽器で大切なものなので、またいだり力を加えたり、勝手に遊んだりしないことが大切。

表1 箏の演奏で大切にしたいこと

「箏の演奏で大切にしたいことはどんなことですか」の問いについて、生徒は表1のように記述している。この段階で、ゲストティーチャーによる指導を行った。ゲストティーチャーによる演奏の指導で中心としたのは、次の3つである。

- 一音一音を「芯のある音の響き」で弾くこと、その為の奏法（親指で弦を弾き一つ前の弦でとめる）。
- 生徒が弾くのに苦労していた「トレモロ」の奏法（親指の爪と人差し指の爪の重ね方や力のかけ方）。
- 創作にあたって、副旋律を創作する時の音の重ね方、縦と横の関係や和音の響き。

ここでは、創作について具体例を挙げて述べる。図1は、「さくらさくら」の前奏について、4年生が創作した主旋律（箏1）に合った副旋律（箏2）を8年生が創作したものである。右が生徒の創作で左がゲストティーチャーのアドバイスによるものである。1音を1拍（七・六・五）で下降していく4年生のふしに合わせて、2音を2拍目に入れながら（八・七六・五）下降していくふしを8年生が創作したのに対して、2音を入れるタイミングを1拍目（八七・六・五）にして、その後の2拍目（六）と3拍目（五）を一緒に下降し

箏2		箏1		箏2		箏1	
七	七	七	七	七	七	七	七
八	六	八	六	八	六	八	六
七	七	七	七	七	七	七	七
九	八	九	八	九	八	九	八
八	七	八	七	八七	七	八	七
七	六	七	六	七六	六	七	六
六	五	六	五	五六	五	六	五
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

図1 児童・生徒による前奏創作の一例

ていく方が、「まとまりがあり、落ち着いた感じがする」といったアドバイスである。実際に二重奏でゲストティーチャーに弾き比べてもらい、クラスみんなで聴くことで、音の重なりや音楽の縦と横の関係、それらによる音楽の雰囲気の変化について感じる事ができ、また、そこで感じたことを個人の創作に活かすことができた。



図2 「トレモロ」の指導

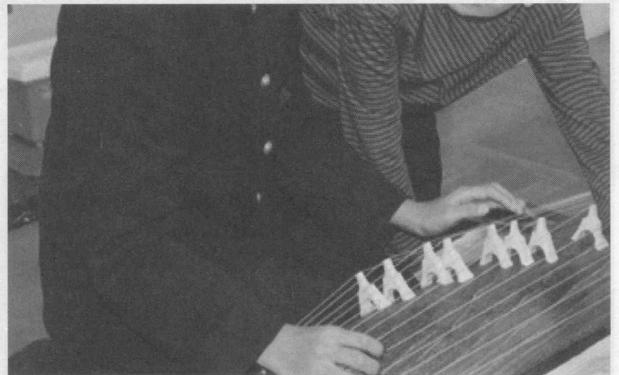


図3 創作の指導



図4 演奏の鑑賞



図5 ピチカートの指導

(8) 第4次「いっしょに表現しよう」の実際

①授業の目標

音の動きや響きを聴き合いながら、アンサンブルのおもしろさを感じる。

②準備物

準備したのは、「ワークシート、拡大楽譜、箏40面、座奏用譜面台40脚、箏爪(児童・生徒分)」である。箏40面中の15面は外部から借用して行った。4・8年生合同の授業をすると、児童・生徒が80名となり、少なくとも2名に1面は箏が必要になる。限られた学年で短期間で行う学習に対して準備するには高額な楽器である。小学校から中学校までを見通して系統的に行う学習として位置づけその教育的効果を実証することで、楽器や爪など演奏できる環境を作っていく必要がある。

③課題への接近

アンサンブルでまず難しいのは、複数の演奏者が同じような拍の流れを感じることである。そうでなければ、音楽の縦の関係がずれてばらばらな演奏になるか、演奏が続けられなくなってしまう。いっしょに演奏するために、導入として、手拍子をしたり歌ったりする遊びを通して、一定の速さで拍の流れを感じる体験をさせようと考えた。また、それにより、気持ちをほぐし、異学年でコミュニケーションをとり合う雰囲気をつくるよう意図した。

④学習課題の設定及び学習課題の追求

いっしょに演奏するためにどのようなことに注意したらいいのかについて、4年生、8年生がそ

れぞれ学んできたことをもとに考えさせ、それを本時のねらいとしてみんなで確認するようにした。児童生徒が考えたことは、次の3つに集約できる。

- 演奏の弾き始めがそろうようにする。お互いによく見合う、身体の動きで合図をする
- テンポが速くならなかったり遅くならなかったりするしないようにする。
- コミュニケーションをとり、気づきや練習方法について、しっかり意見を言い合う。

同じ拍感で、同じ速さを保ちながらいっしょに演奏できるようにするための具体的な手立てとして、4名グループ(4年生2名、8年生2名)の前半を演奏するペア(4年生1名、8年生1名)が練習している時、演奏をしていない後半のペアは手拍子をしたり歌ったりするようにした。それにより、同じ拍の流れをみんなが感じられるように助言をした。



図6 手拍子で拍の流れを感じる



図7 発表会

図8 8年生のワークシート

4 成果と課題

4年生・8年生の異学年交流授業, ゲストティーチャー, 創作活動などを組み込みながら箏の題材を開発した成果を以下にまとめる。

- 異学年交流について, 各々の学年の目標や学習の流れを持ちながら, 現実的に可能な時間数で効果的に交流をして学びを共有, 深めていくような題材開発ができた。
- 箏の学習を7年生から8年生へと系統的に深めていけるような題材の開発ができた。さらに, 4年生での箏の学習も可能かつ有意義であり, 小学校から中学校へ系統的に学ぶカリキュラムづくりの可能性を感じることもできた。
- ゲストティーチャーによる指導で, 箏への意識や意欲が高まった。礼や間や音の響く空間を大切にするといったより深い学びができ, 生徒は箏の良さを感じることもできた。創作についても専門家ならではの助言をもらい, 音の重なりや動き, 箏の音楽の特徴について

感じることもできた。

課題について以下にまとめる。

- 他の伝統的な音楽も含めて, 学ぶ内容を整理し, より体系的なカリキュラムを考える必要がある。
- 異学年交流授業は有意義であるが, 人数が約80名での授業となる。題材を定着させていくには, 楽器の数をそろえることが必要である。